

藝林 GEI RIN

第 六 十 卷 第 一 号

平 成 二 十 三 年 四 月

同じころ(二八五)（平家滅亡直後の元暦二年七月）かとよ、
夥おびただしく大地震おおない振ること侍りき。そのさま世の常
ならず。山は崩れて河を埋み、海は傾きて陸地を
浸せり。土裂けて水涌き出で、巖破れて谷に転ころび
入る。(八五五)（中略）昔、齊衡のころ(八五五)（齊衡二年五月）と
か、大地震振りて東大寺の仏の頭みぐし落ちなど、忌いみ
じき事ども侍りけれど、なほ此度には及しかずとぞ。
すなはち（当座）は、人皆、味気あじき無き事述べて、
いささか心の濁りも薄らぐと見えしかど、月日重
なり年経にし後は、言の葉にかけて言ひ出づる人
だになし。（下略）
鴨長明『方丈記』

「陸奥国地大震動。流光如_レ昼隱映、頃之人民叫呼、伏不_レ能起、
或屋仆_レ压死、或地裂埋_レ瘞。(中略)海口哮吼、声似_レ雷霆、驚涛
涌潮、浜洄漲良、忽至_三城下_一。去_レ海数_三百里_一、浩々不_レ弁_二其涯
浚_一。原野道路、惣為_二滄溟_一、乘_レ船不_レ違、登_レ山難_レ及。溺死者
千許、資産苗稼、殆無_二子遺_一焉。」(八五九)『三代実録』貞観十一年五月二十六日条